

乳がんについて Q&A

**乳がんとは
どんな病気ですか？**

A 乳がんとは乳房にできる悪性の新生物で主に乳管とよばれる乳汁の通り道となる管をつくっている上皮から発生します。

早期には乳管の中を広がっていきと考えられ、この状態を非浸潤がんといいます。ある程度成長すると乳管の壁を破って外(間質)に広がっていきます。この状態になったがんを浸潤がんといいます。

わが国での罹患状況ですが、1年間におよそ76,000人(2010年)の方が罹患されており、年々増加傾向にあります。その原

因は食生活の変化(高蛋白、高脂肪といった食事の欧米化)、初潮年齢の早期化、晩婚化、少子化、初産年齢の高齢化といった生活習慣の変化などが原因と考えられています。

部位別で見ると乳がんは女性に最も多いがんとなっていて、特に40〜50歳代の働き盛りの方が、がんで亡くなる原因の最も多いものとなっています。

どのような人が乳がんにかかりやすいですか

A 先にあげたように乳がんの原因は食事や生活環境によるものが考えられています。肥満のある

方、喫煙者、アルコール摂取量の多い方は注意が必要です。

また、女性ホルモン(エストロゲン)は乳がんにはあまりよくないと考えられていますので、初潮が早かったり、逆に閉経が遅い方、初産年齢が高い方、出産回数が少ない方、授乳経験が少ない方も乳がんになりやすいといわれています。

血縁者に乳がん患者が見える方も要注意です。

乳がんにならないためにはどうしたらよいですか？

A 残念ながら今のところ、乳がんを予防する方法はありません。

乳がんにかかるリスクを下げるには、乳がんにかかりやすい原因にあげたことにできるだけ当てはまらないよう生活習慣に気を付けることが良いでしょう。

乳がんにかかることを防ぐことはできませんが、乳がんによる死亡を減らすという目的で有効であることが科学的に確認されているのが乳がん検診です。

前にあげた浸潤がんの浸潤の部分は大きくなるとシコリとして触れることができるのですが、浸潤がんでも早期のものや非浸潤がんでは触れにくいものが多くなります。このため、マンモグラフィや超音波などの画像検査が重要になります。多くの先進諸国では、マンモグラフィによる乳がん検診がおこなわれ、アメリカでは40〜64歳の女性の50%、イギリスでは50〜70歳の女性の70%以上がマンモグラフィを受診するとされています。その結果、欧米では日本より乳がん罹患率ははるかに高いのですが、乳がんによる死亡率は減少し続けています。日本では、乳がん検診の受診率は20〜30%程度とされており、乳がんの

罹患率の増加に比例して乳がん死亡率も増加し続けています。乳がんによる死亡を減らすには日本でも検診の受診率を高めていく必要があります

乳がん検診とはどのようなものでしょうか？

A 現在の乳がん検診の国際標準は、マンモグラフィ検診です。マンモグラフィとは、乳房X線撮影のことで検査時に乳房をできるだけ平らにして撮影します。

そのため、ひとによっては痛みが強いことがあります。さわることのできないような小さな乳がんも発見することができ、特に石灰化のある乳がんの発見が得意です。検査の感度(がんのある人を正しく診断できる精度)は、80〜90%とされています。

ただし、弱点もあって30歳代といった若い方の乳がん発見率は若干低下します。

検診の対象は症状のない人です。無症状のうちに乳がんを発見し治療することにより乳がんによる死亡のリスクを軽減することができます

ます。40歳以上の女性は、1〜2年に1回、マンモグラフィを用いた乳がん検診を受けるのがよいとされています。シコリや乳頭分泌などの自覚症状がある方は乳がん検診を受けずに直接【乳腺外科外来】を受診するようにしてください

今月の先生



岐阜市民病院 乳腺外科
中田琢巳 先生

- 専門分野
乳がん診療
- 役職
乳腺外科部長
- 主な資格、認定
日本外科学会専門医
日本乳がん学会専門医
- 卒業年、主な職歴
平成3年 岐阜大学医学部卒
平成14年より岐阜市民病院 乳腺外科勤務